

第1回実践事例研究会 「いじめない自分づくり」(福田博行著, 学陽書房) をめぐって

話題提供者 センター協力研究員(1999年度)(杉並区立東田中学校教諭) 福田博行

1999.6.5

本発表の中心となる「いじめ問題の克服プログラム」は、2年前の杉並区の研究奨励校としての取り組みとして行ったときのものである。いじめ問題が、十何年経ってもいまだ克服されていない原因は何なのかということを考えるにあたり、いじめ問題というのを基本的に指導の問題として捉えてるところに最大の問題点があるのではないかと私は考えている。私は、基本的にいじめの問題というのは、学習の問題であるという捉え方をしている。例えば、いじめ問題を考えたときに、いじめとは何なのかと言ったときに、教師も生徒もその中身をきちんと把握していない状況で、指導が行われているという現状がある。より簡単な例をとってみれば、何がいじめになるのかという部分である。どこからいじめになるのか、何がいじめになるのか、これは教師も生徒もお互いわかってない状況である。いじめそのものの中身を全く知らない状況のなかで、いじめをわかっていない生徒を、いじめがわかってない教師が指導しても、これはうまくいくわけがない。いじめ問題に関しては、最低限、教師と生徒が、同じルールの上に乗った上で、同じ共通理解をした上で、はじめてそこで指導して意味がある。結局、いじめ問題に関しては、生徒がいじめをしたという事実を認める指導から入らなければいけない。教師と生徒の共通理解が生まれ、そこでいじめをどうしようかという問題になっていく。したがって、「いじめとは一体何なんだろう」という部分をきちんと学習して、学習ができたうえで、はじめて次に指導が生きるのだろうかという考えがある。「いじめ問題は学習である」。ここからスタートしないかぎり、この問題の解決策は見いだせないのではないかと、私はそういう思いでいる。

この「いじめ問題の克服プログラム」の最大の特徴は、生活指導ではなく、進路教育として取り組んだという点である。まずはじめに、指導のねらいとしては、いじめの行為そのものを克服する指導、そこにとどまらず、いじめを許している、あるいはいじめをする生徒たちの価値観そのものを問題にしていった。生徒自身の生き方、いじめをする自分の弱さ、これを生徒自ら、直視する、あるいは対決する、あるいは乗り越えることによって、

現象として出てくるいじめの行為をただ単になくすだけでなく、この取り組みをとおして、生徒達が自分の生き方を再構築する、あるいはいじめに対する感受性、批判力、行動力を高める。したがって、「いじめ」はあくまでテーマでしかない。いじめをテーマにして、子どもたちの自己変革に迫っていかうということが、この指導のねらいになっていく。

次に、指導計画について説明する。導入のねらいとして、まず子どもの意識をいじめ問題に向けさせることから行った。子どもの意識として、みんないじめは悪いんだと思っているわけではない。いじめを楽しむ子もいれば被害者もいる。それから、被害者であり、加害者という生徒もいる。また、全くオレには関係ないよという生徒もいる。バラバラの生徒に、声をかけても、それがスッと入るわけがない。いじめに対して考えていくという意味ではまず、子どもたちの心のアンテナを全部こちらに向けなければいけない。いじめた側、いじめられた側、傍観者、バラバラの状態、それぞれの生徒の危機感というのもまた異なっている。このような生徒に対して、まず、子どもたちを一斉にこちらを向かせる、いじめ問題に向けさせるという指導から入っていかなければ、この問題には取り組めない。そこで、最初の段階では、とにかく、いじめというのは大変な問題なんだよということを、子どもたちに感じてもらう、そこからスタートしている。具体的には、「逃げない、ごまかさない、いじめない」という学年憲章を掲げた。これは、それぞれの学年に対応していて、1年生は「いじめない」、2年生は「ごまかさない」、3年生は「逃げない」となっている。そうした学年憲章の説明をして、とりあえず教師集団としてとにかくいじめは許さないんだと、認めないんだという決意を生徒達にはっきりと示している。こうした教師側の決意表明を具体化する実践があとからついてこなければ、結局、教師の決意というのはだんだん消えていってしまうと考えたため、この学年憲章の後、NHKの「中学生日記 クラス討論 いじめ」のビデオを見せた。いじめでどれだけ苦しい思いをするのか、いじめられてつらかったといった話を生徒はまず聞くことがないため、ど

れほどつらいものかという体験を知るためにビデオを見せた。それから今度は、自分がどれだけ大事な存在なのかということ、「我が子へ父からの手紙」、これは生まれたときの子どもの、子どもに対する父親の心情を書いた中身になったのであるが、これを読ませて、自分がどれだけ親にとって大事な存在なんだということを認識させ、同時に大河内君の遺書を読ませて、いじめ問題の取り組みの第一歩とした。この中学生日記のビデオ、あるいは「我が子へ父からの手紙」を見て、ほとんどの子どもたちが、いじめというのは非常に重たい問題で、自分たちと切り離れた問題として考えてはいけないんだという、その最初の前提条件ができ上がったように思う。

次に、指導の展開についてであるが、私は、現象として出てくるいじめ問題について、教師集団が直接指導する質のものとして捉えていない。教師が担うのはあくまで予防的な部分であり、取り組みの主体となっていくのは生徒であると考えているため、教師側が意図して誘導する、最初から答えを用意して、そこに向けて教師が生徒を追い込んでいくという指導の形はとっていない。一人ひとりが自分の考えや判断力をもってほしいと考えているため、基本的に、子どもたちが考えていけるだけの材料、あるいは資料、これをどう保障してやることができるのかということを教師の役割として捉えた。そこで、ビデオの資料、生徒自身の「いじめ・いじめられ体験記」、「いじめられ日記」、討論会、意見発表会等の準備をした。生徒達がいじめ問題に対していろんな角度からアプローチして、考えを深めていけるような内容をどれだけ保障できるのかということが、指導の展開の部分では非常に大事になった。とりわけ、「いじめ・いじめられ体験記」、これは生徒達がいじめの体験記を書き、公開することを前提にして書いていくということを行ったのだが、これは、どれだけ我々が日常生活のなかで教師と生徒の信頼関係を作っていけるか、あるいは、いじめ問題に対してどれだけ真剣に取り組もうとしているのか、その姿勢を見せることなしには、不可能であったらと思う。そういう意味では、学年憲章をはじめとして、いじめ問題への取り組みの流れの中で、我々教師集団がとにかく必死になってこの問題に取り組んでいこうという姿勢が、生徒たちにずいぶん伝わったなという思いがした。このいじめの体験記がどこまで書けるのか、この体験記が書けるか書けないかでこの実践は決まるなというふうに思っていたのだが、実際には生徒たちは実に素直に書いてきた。子どもたちのなかにそれだけトラウマとして残っているものが大きいということを示しているように思う。それから、これと平行して、土屋涼さんの「私の

いじめられ日記」を読ませた。一部を抜粋して読ませたのであるが、その際、ここが大事だよということでアンダーラインを引き、私自身のコメントも添えた。ただ読ませるだけでなく、コメントを入れて消化させていき、下線を引くことによって、土屋さんがどんな思いでいたのかという部分を子どもの心の中により浸透していけるようにしながら、60ページ分を読ませた。さらに、土屋さんに送っていただいたビデオ等も見せ、その上で「わたしのいじめられ日記」の体験談の感想文を書かせた。けれども、生徒達はそうしたいじめのひどきに非常に驚きながら、あきれ返りながらも、この時点ではまだ自分の問題としてしっかりととはつかんでないようであった。京都のある中学校のある女の子の体験記である、ということは、自分と直接つながってないわけで、一種テレビドラマを見るような感覚、そういう感覚でこの「私のいじめられ日記」を読んでたという問題点、あるいは限界性があった。ここまでの段階では自分たちの問題として十分に捉えきっていたかということ、捉えきれていなかった側面がおそらくあるだろうと思われた。

それを突破したのが、「いじめ・いじめられ体験記」を読み込むという作業である。「私のいじめられ日記」と同じように、いじめに苦しんでいる仲間が、同じ学年、同じ学級、となりの座席にいることを理解させて感想文を書かせた。生徒たちは、かなりショックを受けていた。いじめた側は、もしかしたら自分が絡んでいたかもしれない、あるいはいじめられた側が読んで、他にもやっばりおんなじような子がいるんだと。いじめられた体験をした子たちというのはわりとみんな孤立しており、自分だけがという意識が非常に強い。みんなあちこちにたくさんいるのではなく、自分だけがやられてるという意識が非常に強いため、他にもそういう体験してる子がいるんだということが大きな衝撃を与えたようである。この段階から、はじめて自分の言動が、いじめの問題とからんできているんだと、自分自身の問題であるという認識が、子どもたちのなかで出てきたようである。

その次に、「いじめをなくせるか」のテーマでクラス討論会を行った。このクラス討論会というのは、基本的に意見を発表すること、きちんと聞くこと、議論をすること、それから社会に目を向けること、それらを通じて、自分の考え方を深めていくこと、そして、集団としてのクラスの指導を高めていくことを目的とした。クラス討論ではいろんな意見が出たのであるが、ここではいじめがなくなる、なくならないというのが完全に分かれた。それから、この後、「いじめを見つめて」という作文を書かせ、いじめ問題の前半のまとめとして、文集を作成し

た。この文集を作るにあたっては、生徒達にまず自分の名前を書き、その上で自分のいじめ・いじめられ体験を中心に、いじめ問題について書くようにと条件をつけた。また、もし謝りたいと思っている生徒はこの文集のなかで、きちんと謝罪をしなさいということと一緒に指示した。というのも、子ども達の間にはいじめってというのは悪いんだという意識がずいぶん定着してきており、子どもたち自身が謝りたいという内容のことを書いてきたからである。この文集は、1学期の終わりに書かせて、2学期に配ったのだが、真剣な雰囲気、静まり返った雰囲気のなかで子どもたちはこの文集を読んでいた。

その次に行ったのは、いじめの種類の見直しである。生徒達は、自分のやっていることが相手にどんな思いをさせているかということに全然わかっていない。具体的に何がいじめになるのか、どんないじめがあるのかを生徒たちに考えさせて、「ふざけ・いたづら」とどこが違うのか、これを一つ一つ検討した。ここでの指導は、あくまでいじめられた側がどう考えるのかということから考えさせた。何がいじめになるのかならないのか、班のなかで話し合いをさせ、それを全部黒板に書かせた。それを3クラス同じことをやって、結局、100以上のいじめが出てきた。子ども達は、我々がびっくりするぐらいいろいろないじめの種類を考えてくれた。そして、子どもたち自身によって、その一つ一つの事例に関して、どこからがいじめになっていくのか、それから、何がいじめになるのか、どこがふざけなのか一つ一つ検討していく。ここで教師と生徒のいじめに関する共通理解が生まれる。この共通理解がなければ、生徒側にとっては、教師がいくら指導しても通らない。

最後に、指導の発展についてであるが、もうこの時点ですでに生徒たちの中には、いじめは悪だという意識、許されないものだという意識はほぼ定着している。そこで、学年文集の読み合わせのあと、クラス代表を決めて、保護者に参加してもらった上で、意見発表会を開いた。生徒の生の声で聞くという体験を新鮮に感じたらしく、この発表会に関して生徒たちは非常に高い評価をしてくれた。その後、感想文を書かせたのであるが、今回の感想文の特徴は、生徒代表の意見影響も受け、いじめはなくなるなくなるというレベルではなく、なくさなければいけないというところまで、レベルアップしていた。子どもたちの心の中でやっぱり化学変化が一つ起こったんだろうなと思う。

その後、「いじめをなくすボランティア」を作った。ボランティアといっても、ここでは特別な組織を作ることの意味していない。子どもたちに、いじめを止められる

力がある人、あるいはその気がある人は、いじめを見たら止めてくれと要請し、いじめを見ても止められない、自信がない子は、先生方に連絡してくれと要請し、そういう形で110数人のなかで30数人集まった。しかしながら、これは完全に失敗に終わった。結局その後を見てみると、このいじめのボランティアの子たちも動いてくれたが、このボランティア以外の子どもたちからの情報がいっぱい入ってきてしまい、このボランティアを作った意味が全くなくなってしまった。子どもたちに自分たちがいじめに取り組んでいくんだという姿勢を作るのには意味があったが、実質的にはあまり意味はなかった。

それから、保護者の文集の読み合わせを行った。意見発表会に参加してもらった保護者の方にいじめ問題に関して、意見交換をしたいということで、参加しなかった保護者も含めて、学年文集、意見発表会、いじめ問題に関する感想・意見を書いてもらって、文集の形で出した。これは、いじめ問題以外で子どもたちに大きな感動を与えていた。親の子どもに対する愛情というのがきちんと文章化されていたため、子どもたちが「私たちがこんなに愛されてるんだ」ということをずいぶん実感したようである。ここでは、いじめ問題とは別に、親に対する信頼感、あるいは親を見直すという、こちらの予想しなかった、波及効果が出てきた。

一番最後に、学年文集「伸びてゆく」を書かせた。最初は一度だけの予定でいた文集だったが、その後子どもたちが意見発表会前後を境にして、意識がずいぶん変化してきたため、もう1回文集を作ることにした。文集の中身というのは、1回目に比べてずいぶん質の高い中身になってきた。文章がただうまくなるということだけでなく、個人、あるいは学年としての共通意識がしっかり生まれてきたことが見て取れる。加えて、最後に自己アンケートをとって、そのアンケートにもとづいての指導も行っている。

これらの取り組みの中で、実践の特徴に関して、簡単に触れていきたいと思う。まず実践の柱となったものは、いじめをテーマにした、生き方を考える指導、進路教育であるということである。いじめ問題の取り組みは、生活指導の領域という意識が非常に強いが、そのほとんどというのが、いじめ問題が表面してからどう取り組んでいくのかという、後追いの指導に終わっているのが現状である。今までの指導では、行為・現象としてのいじめが、少なくとも教師の目に留まらなくなれば、そこで終わっていた。しかし、今のいじめは、強い指導、生活指導的な部分の指導をすればするほど教師の目にふれな

くなり、いじめ問題は深刻になっていく。ここで問われてくるのは、その行為・現象としてのいじめではなく、いじめのその一番根本にある、子どもたちの価値観をどうするかという点である。今の子どもたちは当然、学歴偏重・競争社会のなかで、形成された価値観を持っているわけで、彼らのいろんな社会観や歴史観や労働観等を背景にして、いじめを許す、あるいはいじめをする自分の心、これをどう見つめさせて切り込んでいくのかが問題になっていく。いじめ問題の取り組みというのは、自己理解であるし、自己認識であるし、自己変革である。この進路教育のなかに位置づけられるいじめの問題は、いじめが表面化してから後追的に取り組まれる今までの実践と比べて、非常に先取的な指導が可能になってくる。いじめがあるとかないとかと無関係に、計画的に時間を十分持って、生徒の反応を確認しながら、いろんな選択肢のなかから選んで取り組むことができる。

第二に、5月から11月にかけて、非常に長い指導をした。子どもたちの取り組みというのは、長引くと非常に間延びするものであるが、いくつかのヤマを作りながら、非常に長期間にわたって取り組みをした。一つの何かの経験をした、一つの感動があったから、即子どもが変わるということではなく、一つの体験や感動が子どもの心に影響を及ぼし、それが行動や考え方にでてくるまで、ある程度歳月はかかっていく。そのためにじっくり取り組んでいくしかないのではないかと思う。

第三に、教師主導の取り組みだということである。いじめの問題に関して私自身は、最初から生徒の活動を中心に取り組んでいくことが可能なかという疑問が非常に強い。生徒達がいじめを克服するために、あるいはなくすために、安心して発言したり行動していける条件を、大人が教師がまず保障しなければいけないだろうと思う。この保障をしないままに、生徒に取り組ませるのは僕は無責任じゃないかなと、そういう気がする。つまり生徒たちがいじめ問題に取り組むことで、逆にいじめの対象にならないことが条件になっていく。そういう条件は誰が作るのかといったら、それは教師集団じゃないかなと私は考えている。従って、いじめ問題の初期の指導においては、教師集団がまず動かなくてはいけないだろうと思う。

第四に、学年世論の形成を目的にしたことが特徴とし

てあげられる。平均的であることに安心し、付和雷同的な傾向の強い今の生徒達のなかに、いじめは悪であるとの学年共通意識、学年世論を作り上げることは、非常に大きな意味があると考えた。他のことに関しては、子どもたち一人ひとりが結論を出すということを前提条件に進めてきたが、この学年世論を作り出すということは、かなり意識した。生徒が怖がるのは、大人ではなく学級や学年の仲間である。いじめは悪だということをきちんと認識しないような学年の共通の意識があるからいじめが起こるわけで、その意識っていうのをひっくり返すことを考えた。つまり、学年全体がいじめは悪いことなんだ、それは許されないことだという世論ができあがれば、今度は、いじめをやろうと思っても仲間達の目があるので、子どもたちは、いじめに走ることが非常に困難になっていく。そういう意味で、学年世論を作れるか作れないかということが、いじめの予防にとっては決定的な意味を持つだろうと思う。

第五に、それから、積み重ね、繰り返しの指導を行ったということがある。半年間かけて取り組んだわけであるが、全部で読ませる指導が8回、書かせる指導が12回、そのたびに、テーマの視点や角度を変えて、あるいは素材を変えて、何度も何度も、しつこいくらい繰り返し積み重ねて、生徒達に考えさせた。生徒たちはこの繰り返しの読み書きのなかで、少しずつ、自分の考え方を深めていった。

最後に、いじめの事実を公開したことも特徴の一つである。いじめ問題の根本にあるものは、一部の生徒の問題だけではないし、学校だけの問題でもない。保護者の協力も必要になってくるため、事実の公開をしなければならないだろうと考えた。いじめの事実を公開することによって、親が危機感を持って、その危機感が、いじめ問題に対する親の姿勢を変えていくだろうし、学校と歩調を合わせた取り組みにつながっていくのではないかと考えた。いじめ・いじめられ問題を、生徒の保護者の一人ひとりが、自分の問題として、子育ての問題として、自分の価値観の問題として、どこまで考えられるか、これは十分ではなかったが、いじめ問題を考えるという冊子、あるいは意見発表会を見てもらう、あるいはいじめの事実を公開することによって、保護者の意識への切り込みも、意識して行った。